

Migranta Plumo

verkita de Julio Baghy
eldonita de Dokumenta Esperanto-Centro k.a., 2018
117 paĝoj

本書はハンガリーの著名なエスペランチストのユリオ・バギー（1891～1967）の没後50年を記念して再刊されたものである。本書の初版は1929年刊行であるから、今回の第2版は、ほぼ90年ぶりの再刊ということになり、バギーの著作のなかではあまり目立たない存在だったのであろうと思われる。

バギーは1915年1月に第一次世界大戦に応召し、同年9月に捕虜となり、シベリア各地の収容所を転々とした。過酷な環境のなかで、俳優として舞台に立ったり（彼の本業は俳優だった）、収容所でエスペラントを教えたりもした。

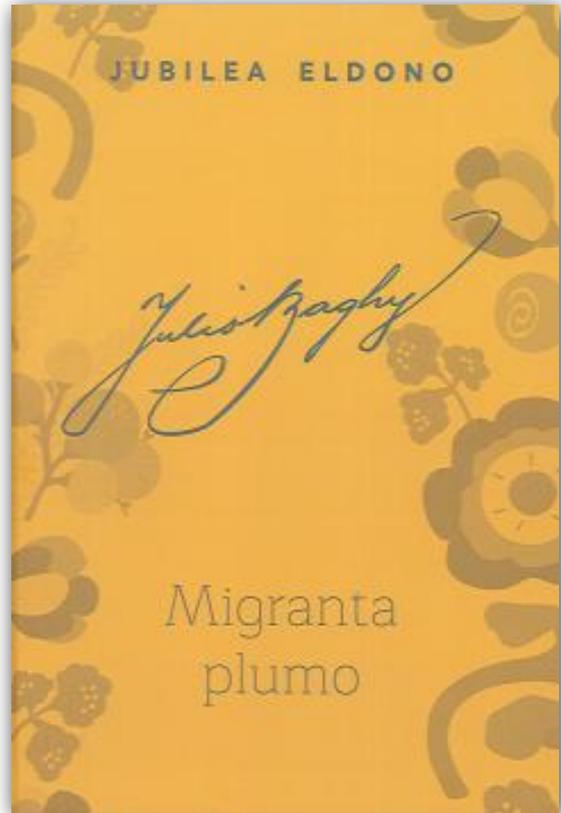
彼がシベリアにあった1918年、オーストリア・ハンガリー帝国が解体し、民主主義政権が成立するが、ほどなくして崩壊し、これにかわって1919年にはベーラ・クンに率いられたハンガリー・ソヴィエト共和国が成立する。しかし、これもわずか133日で倒れ、その後はホルティによる独裁が長く続くことになる。

バギーはそうした敗戦後の混乱のさなかの1920年末にやっと帰国する。そのときには妻と娘はすでに彼のもとを去っていた。健康も損なわれており、彼はそれから18か月を無職で過ごした。

やはりハンガリーのカロチャイはバギーと同年、ソロスは4歳年少で、彼らも青年時代にもろに戦争に巻き込まれ、過酷な体験をしたのち、辛うじて生還した。そして戦後、3人は“Literatura Mondo”誌を創刊して、戦争体験を踏まえて精力的に小説や詩を発表し、エスペラント文学の新たな地平を切り開いた。

さて、本書には短編小説、戯曲、詩が収録されている。初出誌や発表時期は明記されていないが、恐らくは帰国後の1920年代に執筆、発表されたのであろう。とりわけ小説は、読むほどに彼の個人史と同時代史が色濃く投影されていることが感じられる。以下3編ほどをかいつまんで紹介したい。

巻頭の小説“Feodor Nikolaeviĉ Felšov”は、ハンガリー人の戦争捕虜を語り手とする一人称の小説である。彼は、わずか17歳で亡くなったロシア人の少年の葬儀に立ち会う。少年は彼が初めてエスペラントを教えたロシア人であった。少年がエスペラントに託した希望、その希望を受け継いでエスペラント運動に取り組む決意が語られて感動的であるが、いかにも若書きを思わせるそのあまりにもストレートな語り口に、私などは、ある種の息苦しさや違和感も覚える。



巻末の小説“Zumas la samovaro”も同じく、やはりロシアで捕虜になっている男性によって語られる。彼は夫と子供のいる女性から求愛される。3年も女性を抱いていなかった彼の心は揺れ動くが、故郷に残した妻や娘のことを思い、かろうじてそれを拒絶する。しかし、皮肉なことに、やっと帰国したとき、妻と娘は彼のもとを去っていて、なつかしいわが家で待っていたのは、年老いた愛犬と深い孤独だけであった。

ともに僅か2～3ページの小品ながら、あたかも映画のワンシーンのように、具体的なエピソードが切り取られて読者に示され、印象的である。また、いずれも捕虜あるいは帰還者という、最底辺を余儀なくされた弱者の立場から描かれた、自伝的色彩の濃い作品であって、この2編が巻頭と巻末に置かれていることが本書の性格を示しているように思われる。

他方、“Nigra kristnasko”はポグロムを背景とする小説である。クリスマスの夜、貧しいユダヤ人の幼い息子が結核のために死にかけている。彼はクリスマスにはユダヤ人のよい子のところにもイエスが来てくれると信じて疑わない。父親は息子の願いをかなえるため、かつてポグロムに参加したクリスチャンの若者に懇願して、瀕死の息子の病室に招き入れ、息子は若者が携えてきた幼子イエスの像を見ながら満足して息絶える。痛切な感動を与える作品である。

その他の作品にも簡単に触れておこう。“La ŝuflikisto”や“Sinjoro Melonkapo”では、上記の作品同様、作者の視線は貧しい者や小市民の生活に注がれている。“Fraŭlino Degel”や“Praktika instrumetodo”は、はうって変わって、エスペラント運動への皮肉が利いた風刺的作品である。戯曲では、“Samumo”は砂漠を舞台にして愛の葛藤を描いた作品だが、いかにも古めかしい印象を受ける。“En maskobalo”はオペレッタ風の軽快なドラマである。

なお、バギーは、自らの捕虜体験について、詩集“Preter la vivo”(1923)（その中でも特に冒頭の“Tra Siberio”という表題のもとにまとめられた23編の詩）や、“Viktimoj”(1925)と“Sur sanga tero”(1933)という2編の名高い小説、あるいは“La verda koro”(1937)などで、繰り返し描いている。また、本書所収の作品については、Marjorie Boultonが“Poeto fajrakora”(1983)で詳細に分析している。本書はクロアチアとポーランドの4社による共同出版である。

(La Movado 2019年2月号掲載)